

単元（題材）及び授業構想のポイント

資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

各教科等において目指す資質・能力を育むためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図ることが大切です。特に、「深い学び」の鍵となるのが「見方・考え方」であり、児童生徒が「見方・考え方」を働かせて「深い学び」を実現しているかどうかについて、児童生徒を主語とした授業改善の視点をもつことが大切です。



【授業改善の視点】

- 学ぶことに興味や関心をもつ
- 自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる
- 自分の考えをもった上で話し合う
- 他者との協働や対話、先哲の考えに触れることにより、自己の考えを広げ深める
- 知識を相互に関連付けてより深く理解する
- 情報を精査して考えを形成する
- 問題を見いだして解決策を考える
- 思いや考えを基に創造することに向かっている

主体的な学び **対話的な学び** **深い学び**

【留意事項】・児童生徒の姿から三つの学びの実現状況を把握し、一体として改善・充実が図られるようにする。
・単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行う。

授業改善と評価・指導と評価の一体化を図るためには、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かすことが大切です。
・児童生徒が「見方・考え方」を働かせているかどうか自体は評価の対象とするものではありません。しかし、授業中での児童生徒の学びを振り返り、授業改善を行う中で、児童生徒が「見方・考え方」を働かせることができていたかを確認し、更なる指導の改善等につなげることは重要です。

な意義を明確にする議論が展開され、各教科等において育成を目指す資質・能力が三つの柱に基づき整理されるときに、「見方・考え方」も教科等ごとに整理された。「見方・考え方」は、「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」とされ、その教科等の本質、その教科等を学ぶ意義とも重なりとされる。

さらに、「見方・考え方」は「教科等の教育と社会をつなぐ」、言い換えれば、子どもたちが大人になって生活していく際にも重要な働きをするものでもある。

Ⅱ 「見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成する授業を実現する上で配慮すべき事項

(1) 学習指導要領の各教科等の目標と「見方・考え方」

まず、学習指導要領の教科等の目標に「見方・考え方」を働かせることが含まれている(※1)ことを確認する必要があります。

そして、各教科等の学習指導要領の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」1 (1)において、「見方・考え方」を働かせる授業を実現するための学習活動の工夫について記載されている(※2)。

「子どもたちが学習や人生において『見方・考え方』を自在に働かせられるようにすることにこそ、教員の専門性が発揮される」と求められる」とされ、「深い学び」の視点から授業改善をし、子どもたちの「見方・考え方」を働かせる授業に迫ることが、教師に期待されている。

(2) 授業デザインと「見方・考え方」

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を進める際には、子どもたちが「見方・考え方」を働かせて学べるような授業デザインを考えることが重要である。

各教科等の特質に応じて、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、授業改善の在り方を検討することが求められている。

なお、各教科等の解説において示している各教科等の特質に応じた「見方・考え方」は、当該教科等における主要な「見方・考え方」を例示したもの(※3)であり、実際の授業で子どもたちが働かせる「見方・考え方」については、その例示を踏まえながら、学習内容等に応じて柔軟に考えることが重要である。

(3) 学習評価と「見方・考え方」

観点別学習状況の評価の対象はあくまでも各教科等で育成を目指す資質・能力をどの程度身に付けているかどうかであり、「見方・考え方」を働かせているかどうかか自体を評価の対象とするものではない。

しかし、教師が自らの指導のねらいに応じて授業の中で子どもの学びを振り返り、授業改善を行う中で、子どもたちが「見方・考え方」を働かせることができていたかを確認し、教師の更なる指導の改善等につなげることは重要である。

※1、※2、※3……資料2参照(各教科のみ作成)

【参考】

小学校学習指導要領(平成二十九年告示)解説 総則編
初等教育資料2017年11月号
初等教育資料2019年9月号

資質・能力を育成する「見方・考え方」を働かせることを通じて

資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。

「見方・考え方」は、新しい知識及び技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものであり、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが求められる。

この「見方・考え方」とは何なのか、「見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成する授業の実現に向けてどのようなことに配慮すればよいのだろうか。

Ⅰ 「見方・考え方」とは何か

(1) 「見方・考え方」の定義

学習指導要領総則において、「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」と定義されている。言い換えれば、各教科等にはそれぞれ学習対象があるが、その学習対象にどのようにアプローチしてどのような視点や考え方で捉えるのかという教科等の本質に迫るための視点や考え方が「見方・考え方」である。

従来から数学や理科などの一部の教科等においては類似の概念が用いられてきたが、今回の学習指導要領では、そうした従来の整理とは別に、全ての教科について、再整理している。

(2) 「深い学び」と「見方・考え方」

今回の改訂における審議では、「主体的・対話的で深い学び」を実現する上で、各教科等の資質・能力の育成の観点からは「深い学び」の視点は極めて重要であるとされてきた。「深まり」を欠くと表面的な活動に陥ってしまうという指摘もあつたからである。

また、「主体的な学び」や「対話的な学び」はその趣旨が教科共通で理解できる視点であるのに対し、「深い学び」の在り方は各教科等の特質に応じて示される必要があるとされ、各教科等の学びの「深まり」の鍵となるのが「見方・考え方」であるという見解が示された。

(3) 「見方・考え方」と資質・能力の三つの柱の関係

学習指導要領において「見方・考え方」は、育成を目指す資質・能力の三つの柱とは別の概念として整理されている。

「見方・考え方」は「深い学び」の鍵になるものとされているが、これは「見方・考え方」を働かせることにより資質・能力が育まれるということである。すなわち、各教科等の学びを通じて子どもたちが資質・能力を獲得する過程で、子どもたちが「働かせる」ものである。

また、「見方・考え方」を働かせることで資質・能力が更に育まれたり、新たな資質・能力が育まれたりする。またそれによって「見方・考え方」が更に豊かになる。というように、「見方・考え方」と資質・能力は相互に支え合う関係にあるとされている。

(4) 「見方・考え方」と当該教科等を学ぶ意義

今回の改訂においては、なぜそれを学ぶのか、それを通じてどのような力が身に付くのかという、教科等を学ぶ本質的

図画工作、美術 表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させながら育成する授業づくり

表現(発想や構想)と鑑賞の指導の関連を図る際には、発想や構想と鑑賞の学習の双方に働く中心となる考え(学習の中心)を軸にそれぞれの資質・能力を身に付けられるようにすることが大切です。発想や構想と鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させて学びを積み重ねることが、より豊かで創造的な「思考力、判断力、表現力等」の育成につながります。(※ 図画工作科では、目標(2)「造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え」に当たる。)

【題材例】小学校第3学年「のこぎりザクザク生まれる形」 内容のまとまり「絵や立体、工作」「鑑賞」(全6時間)

学習の中心：形や色などの組合せによる感じを基に自分のイメージをもち、木片の形や色などを生かしながら、どのように表すかについて考えている。

発想や構想

●のこぎりで切った木片を並べたり組み合わせたりしながら、表したいことを見付ける。(第3時)

S1: 積み重ねたら階段に見えてきた。どうかな。

S2: 斜めにずらして積み重ねたんだね。僕の切った木片を組み合わせたら、生き物の口に見えてきた。

T: 大きい口で、強そうに見えますね。

◇教師の共感的な声掛けや友達との対話が、児童自身のイメージを明確にすることにつながります。

鑑賞

●学習のねらい ◇指導のポイント T: 教師 S: 造形的な見方・考え方を働かせながら学んでいる児童の姿

●完成した作品を互いに鑑賞し合い、造形的なよさや面白さ、表したいこと、いろいろな表し方などについて、感じ取ったり考えたりしたことを話し合いながら、自分の見方や感じ方を広げる。(第6時)

S2: 竜の口が大きく開くように、薄く切った木片を入れてみたよ。でも、体にいろいろな形の木片を使ったら、でこぼこになってしまったんだ。

S1: 色の違うでこぼこがウロコに見えていいと思うよ。

T: なるほど。更に迫力のある竜に見えます。S1さんも、同じく様々な形の木片を使っていますね。

S1: 木片の角度を工夫して長い階段にしました。みんな楽しんでるように展望台もつくりました。

S2: 幅広く切った板を展望台にしたんだね。すべり台もあると、みんな楽しんでるだろうな。

◇話し合う中で、共通点だけでなく異なった捉え方や感じ方を大切に、互いのよさや個性などを認め合うように活動を進めるなどの配慮が必要です。

創造的な「思考力、判断力、表現力等」の育成

●木を切って新しい木片を組み合わせるなどしながら、どのように表すかについて考える。(第4時)

S1: 木片の向きを変えて積み重ねたら、曲線になってきた。一段一段の大きさを工夫して切ろう。

S2: 竜の口に見えてきた。長い体を曲げているようにしたいから、細かい木片をつないでいこう。

◇児童が主体的に表現を試したり、思いに合う材料を選んだりできる学習環境づくりが大切です。

◇製作過程や作品を撮影し蓄積することで、自分の作品の表し方の変化を振り返られるようにします。

発想や構想と鑑賞に関する資質・能力の相互の関連を図ることは、表現活動において発想や構想と関連する創造的に表す技能を高めることにもつながります。

表現と鑑賞は密接に関係しており、「A表現」と「B鑑賞」の相互の関連を十分に図り、資質・能力を身に付けられるように指導計画を工夫する必要があります。